



TITLE:

## 政治學者の觀たる國家(二)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

---

CITATION:

小川, [琢]治. 政治學者の觀たる國家(二). 地球 1928, 9(6): 397-405

ISSUE DATE:

1928-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183454>

RIGHT:

# 地球第九卷第六號

昭和三年六月一日

## 政治學者の觀たる國家(二)

小川 琢 治

### 四

前三章に互つて述べた所により從來政治學者の見解が國內に於いて自國を考察する立場に在る爲めに國家といふ概念が全く一方に偏つたことが明かである。然れど若し眼界を廣めて過去の歴史に溯つて自國の盛衰を考へ又は現在列強の對立する形勢を觀たならば制度の整頓や社會の施設に專注する意志權力と緣故の遠い別種の意志が旺盛なるか否かが國運の消長を支配し、此の意志なしには存立が怪しくなる事實が歴々と認められるから、眼を張り之を正視し、耳を傾けて之を聴くの外はない。故に内部から觀た國家といふ概念のみに即した見解は環境を無視して有機體の生存を論ずると同じく、偏見の結果が恐るべき不利を招くこととなる筈である。外部との關係即ち列強の一として國家を考察する立場から觀れば景相は全く異つて來る。

チエレン氏は世界戰爭の當時を回顧してその突發の時瑞典政府が法令で規定した國立銀行紙幣の金貨交換を停止した實例を舉げて、法律を破棄する爲めに生ずる國內の利益問題が起り得るも、而

かも眼を國外に轉じて冷靜に他國を視れば、直ちに法律の一面が國家の唯一の面でなく、又た固有の面でもないことが明かになる。必要は容赦を知らぬといふ諺が何れの場合よりも國際生活に通用し、生存及び生長の競争が激烈となれば、國家の秩序に關する法律面が全く消滅して、その自然面のみを外へ向ける様になる。強國の死活問題が起つた場合に陸上及び海上の法律が殆んど何の意義をも持たぬのは、法律を愛せぬ爲めではなくて國家の生命をより以上に愛せねばならぬ爲めに外ならぬ英國政治家が『善かれ惡しかれ我が邦』Right or wrong, my country と叫ぶのは不可解の語の如きも、自分の國の行爲に決して惡といふものがないことを意味し、國家の本質が法的要素 Rechts-elemente 力的要素 Machtelelemente から成立ち、恰かも人類生活に倫理と生物的性欲とがある如きものであるといふ。

此の如く考察してチエレン氏は國家を歴史に就いて追跡すれば人類と同じく官能と倫理とを具備した本質を有すると結論した。

此の立場を異にした考察により國家 Staaten とひ列強 Mächte という概念に思考内容の相異が明らかになる。之を瑞典國の例を取つていへば一方から分析した結果は立憲的國體を有し、他方からは歐洲列國の體系に屬することとなり、同一の對象を異つた光で見た爲めに此の如き相異を認めるのである。然れども尙ほ深く立ち入つて考ふれば此の兩概念には範圍に廣狹の相異があつて、憲法は國家の色々な面の一に過ぎぬ。力としての國家 Staat als Macht と法としての國家 Staat als Recht を包含する更に廣い概念であつて、逆轉し得ないものである。今日までの政治學者の國家と

いふ概念は狭い法的のもので、統計學や地理學では更に廣い事實上の概念に手を延ばしてゐるが、今や我々は古い政治學の命題 These と地理學の反對命題 Antithese とを超越して綜合した政治學を必要とする。

此の如く政治學の視界を廣めんとするに當り、その地業は既に出來てゐるものゝ如く、獨逸には法律の一面に偏した見方に反對して色々の方面に廣めねばならぬといふ意見が既に起つてゐる。一九〇三年にリハルド・シュミット氏がエリネック氏政治的文學史を批評するに當りその國家に於ける力の要素を餘りに忽諸に附したといひ、ベンク氏が此の關係に於ける地理學の限界を定めるに當り、將來改良された政治學を表現するに、單に法律的組織とせず種々雜多の機能を持つた活きた有機體として考察すべきであるといひ、舊式の單純なる統計でなくして政治的生活の全幅を包括するものでなければならぬと考へた。茲に展開せんとする所は恰かも此のプログラムである。チエレン氏はいつてゐる。

## 五

チエレン氏は一九〇五年に從來の政治學者と異つた立場からの國家觀を試みて『現代列強論』を公にするに當り、大強國そのものにも生物學的事實を認めざるを得ぬ、その自個の生活力と好氣運とにより相互に間斷なく競争を續けて、生存競争と自然淘汰の作用を受けるものである。我々はその生れ出て生長するを見、又た他の生物と同じくその衰弱し死滅するを見る。故に國家は生の形態 Form des Lebens であつて、地上の生の形態中最も宏壯なるものである。之を此の如きものと

して其の發展の法則を闡明するを目的とする生物政策的 Biopolitical と呼ぶべき研究の對象となる譯である。といふのが茲に紹介する『生態としての國家』に於て政治學の對象としての國家なる範圍を擴大した概念の心核となつてゐる。

現代列強論を評したボツセルト氏は此の説を比較政治學と呼んだが、地理學でも言語學でも近代科學となる階段に比較研究法を経たのであるから、政治學に於ても同じく國家の具象的本質の研究に當り比較研究法に基づくべきもので、是により始めて獨自の科學として地歩を占め得るは勿論である。

此の如く法律主體としての國家を政治學の對象とする代りに力(強)としての國家を取り、國法學から國際法學的の立場に透視の範圍を移動すれば、教育組織に現存する大缺陷が補はれて、政治學なるものゝ研究に活氣を與へ、深みを加へることゝなり、又た實際の政治に對して直接に役立つことになる譯である。

狹隘なる見方から離れて事實上現存する國家を考察すれば、地理的及び人種的要素の重要なものは直ちに認められる所である。國家は一の生であつて、それには生命の危險もあれば生活の向上の必要もあり、且つ又た生存の權利も之に伴ふのである。而して此の生たるや時と國とを異にするに従ひ各異つた手段と目的を以つて行動し努力するを意味するもので、此の手段目的を知ることは眞の政治學に取つて制度法規及び數量の輪廓を知ると同様に必要である。此の方向に於ける研究は事實上現存する列國の經驗的觀察を前定し、何れの國家をも國土として、經濟として、國民として、公

其組織として及び統治として順次考察するものである。此の五つの要素は五指の如く平時に働き戦時に闘ふもので、その何れをも無視し難い。

此の關鍵により政治學と他の科學との限界を定めることは容易となる。その左翼は地理學に非ずして地政策學 *Geopolitik* であつて、その對象は土地に非ずして政治的組織の行き渡つた土地即ち國土 *Reich* である。之れに對立するその右翼は國法學又は憲法史に非ずして立憲及び行政政策學 *Verfassungs-Verwaltungspolitik* である。此の中央に國家官能の傳達者たる政治的に組織された人類の集團即ち國民が立ち、之を論ずるは人種學に非ずして人種政策學 *Ethnopolitik* である。而して之と地政策學との間に立ち、生業を營む國民即ち經濟としての國家を論ずるは國民經濟學に非ずして經濟政策學 *Wirtschaftspolitik* であり、他翼との間には自然的并に文化的に訓育された國民即ち特殊の意味の社會としての國家を論ずる社會政策學 *Sozialpolitik* が立つ。

是で理論上限界は明瞭となつたが、實際は必しも之を認識することが容易でない。何れの科學にも共通なる如く一線を以てその限界を分割することが出来ない。而して此の困難は問題そのものの、内面的必要即ち體系そのものに起因する。茲に示した五つの方向で國家の本質を盡くしてはゐるがその箇々の要素は相互に組み合つて間斷なき輪動を成すものであるから、箇々の要素の特性を明かにすると同時に國の生的統一を成した此等の相互の内面的關係をも明かにせねばならぬのである。

チエレン氏の茲に劃定せんと試みた政治學の範圍に於て新らし方面は地政策學と人種政策學とであつて此の兩方向に於て國家の生物特性が最も明瞭に現はれて之を否定し難く、國家の行動を之と

切離されぬ所の客觀的範疇たることも明かである。故に之を國家に特殊なる自然的方面 *Natursei-* であるといひ得べく、之に對照する經濟社會統治の三者は創造し又た自由に働き得る意志として國家の意志が現はれる所の文化的方面 *Kulturseite* と呼んで區別し得る。之を換言すれば前者は生の本質としての國家を心核として表現せんとし、後者は國家の傳達者たる個人を主眼としてその文化的本質を認めんとするものである。然れども此の型式的對照は拘泥す可らざるもので、國家生存の必要は文化的方面に種々の壓迫を加へるは勿論で、國家人格の關係が自然的方面に立ち入つてその自由意志を働かすことも亦たあり得る。

以上はチエレン氏の序論に就き梗概を抄譯しつゝ字句に拘泥せずに要旨を示すに勉めたに拘らず省略の爲めに明瞭を缺く所があり、又たその記述中に瑞典人には平凡明白であつて我々には全く不案内な箇所も少からずある。然れども之を概括すれば政治學の一面は氏の所謂自然的方面即ち國土と國民そのものに就いての研究でなくてはならぬことを高調するもので、

Wir konstatieren nur die Tatsache, dass die Staaten, wie wir sie in der Geschichte verfolgen und wir uns in Wirklichkeit in ihnen bewegen müssen, sinnlich-vernünftige Wesen sind — wie die Menschen. (第三十一、二頁)

といふ一節がその眼目を成し、人類の生物として自然的方面と理性倫理を有する人格に伴ふ文化的方面との兩面の内、前者に就いて詳論する前提として、從來政治學者の狹隘なる見地を離れる理由を説明したものである。

チエレン氏の生態としての國家なる概念に對する地理學者の意見は賛否二途に分れ、最近に浩瀚なる資料を網羅整頓したフランクフルト（アン・マイン）大學のオットー・マウル教授はラッツェルの足跡を追ふた此の研究を『國家の本性』を論じた章の最後に置き、茲に引いたと同じ語を引用した後、國家に對する見解を概觀し來り是で一應終結し且つその頂點に達したといひ得、政治學の立場から得た生物學的有機體としての國家の認識も亦た地理學上の見解に略ぼ一致すると考へた。マウル氏は此の立場から政治地理學を組織せんと試みて、その第一篇（地理的現象として、即ち空間的有機體としての國家）は此の章に續いて第二章に國家の生活手續 *Lebensprozesse* に於て、出產、國家細胞、生長と自然淘汰、領土戰 *Kampf um Raum* 領土擴大の頂點、衰滅、蕃殖、壽命と年齡に細別して詳論し、第三章に國家の機關及び國家觀念、第四章に列國 *Staatseschaft* を簡單に論じた。故にマウル氏はチエレン氏の概念から出發せんとする賛成論者である。

一九二〇年物故したズーバン氏はチエレン氏の有機體に全然反對の意見を絶筆といふべき『政治地理學綱要』に載せてゐる。

ズーバン氏は國家は複雑なる現象であつて、三の異つた方面から考察して各異つた形相を示すといひ、政治地理學では國家は一定の境界内即ち地表の一區に於ける人類の集團であつて、換言すれば地球全面の中の人類に充たされた一部であるといふ。その形狀、大さ、位置及び構造を我々は國家の地理的範疇と呼び、政治地理學は國家の自然的基礎論であるといひ、第二に立法上から考察すれば



組織としての國家が現はれ、尙はこの外に人格といふ見方で國家を考察し、第三に一種の技術として國際交通に於ける政治家の活動を主眼ともし得るが、是は全く科學として成立してゐぬといふのである。

ズーバン氏の有機體説に反對する理由の一は一たび死滅した國家の甦生が生物といふ概念と一致せぬといふに在る。波蘭の例の如く土地と國民との二つの國家要素が結び付いてゐる場合に限り甦生が可能であるとして之を解するにせば、巴比倫へ拉し去られた後の猶太國の再興及び英國の反對がなかつたらば實現すべかりしジオニスト運動の例は土地と離れた國民にも甦生の機會があるでないかといふ。但し之に對してはマウル氏の反駁した如く、植物の一個體が枯死してもその根なり種子なりが土中に潜在して再び芽をふく場合もあれば、或る動物の假死狀態の場合もある譯で、例を東方に求むれば范增が項梁に説いた語に『楚雖三戶、亡秦必楚也』といふのは甦生の意義を明かに示してゐる。故に國家の甦生を以て生物界の現象との差異の徴候とするズーバン氏の所論は首肯し難い。ズーバンの生活線 *Lebenslinie* といふ考へ方は是よりも面白い。國家有機體説 *Staatsorganismus* と對立して國家機械説 *Staatsmechanismus* も亦た屢耳にするが、此の比較も亦た或は當てはまり或ははまらぬ場合があるといひ、生物と機械との差異は若し生活即ち運動を意味するものとして、前者は原動力が内に在り、後者は外に在つて、共に之を起す機能が止れば全體の運動が停止する點に於て一致する。然れども兩者の相異は生活線に在るといつた。ズーバン氏は出産と死亡とを起點と終點とし、共に同一水平線上に在るとし、之を絶對基準線と呼び、有機體の生活線は曲

線を成し、その生長を示す上昇する側が稍長く、衰滅に向つた下降する側が短くて、頂點が終點に近く、且つ此の曲線は幾回でも上昇と下降とを繰り返し得ると考へた。機械の場合は之に反して起點と頂點と一致し機械の使用久しきに亙る間に能率が減じて下降するのみで、再びその要部を取り換へて又た運動し得るも、その變化は折線で示される。ハプスブルグ家の奥國と新らしい獨逸帝國との盛衰を觀るに前者は急激に曲折し後者は急落する差異はあつても共に曲線を成し、之に反して波蘭は折線を成してゐるとし、是により觀れば國家を絶對に有機體視することも機關視することも出來ぬといふのである。

然れども此の類推法に根本的誤謬が認められる。波蘭の第十八世紀末の滅亡は露奧普三國の分割であつて、之を草木に喩ふれば突然之を切り倒した場合で、生物自然の生死と比較にはならぬ。故にブーバン氏の生活線の中曲線で國家の盛衰を圖示する考へ方は面白いが、之を根據として國家生態觀に反對する理由は成立せぬと想はれる。